

「名前は佛壇屋源兵衛様。やつぱり様づけや。どこの妓や。備前屋店。小照事、本名たね。やつぱり本名つきで書いたア。備前屋店小照事本名たね。アツ、備前屋……備前屋。店小照事……店小照事、本名たね……本名たね、源さんこれ一緒や。」

「それ見んかい。それやつてにシヨムないと云ふたが無理かい。」

「下駄屋喜六様。佛壇屋源兵衛様。源さんここ違ふ。」

「名前が一緒やつて、どうするいな。」

「好きなお方は貴方一人やと云ふときやつて、人を馬鹿に仕よる。くそつたれめ。イヒツ、イヒツ……。」

「オイ、喜いやん納し。喋りの清八が来た。」

「源やん。甚い悪い所へ来たなあ。また出直して来るわ。マア。」

「オイ、清八や。這入りんかいな。氣の悪い事しないな。門口まで来て這入らんと歸つたら氣が悪いやないか。」

「イヤ、入れて貰ふてもだんないか。」

「何時でも這入るのに、今日に限つて去ないでも宜いやないか。」

「そんなら入れて貰を。(煙草を喫ひながら顔を見る)時に源やん。お前と俺とは何やへ。」

「ケツタイな事を尋ねるなア。兄弟みたいにして居る友達やないかいナ。」

「オイ源やん。友達といふ者は飲んだり食ふたりするばかりが友達やないで。お互にいかん事が有つたら、あゝやないか、こうやないかと云ふてこそ正眞の友達やと思ふね。今門口まで来たら、喋りの清八が来たと云ふたなア。俺がなんぞお前等の悪い事を喋つた事が有るか。濟まんが云ふて悪い事なら一つしかない此首がとんでも俺は云はんつもりや。それに喋りと云はれたら、お前が氣が悪いか、俺が氣が悪いか。オイ。」

「オイ清やん。物をあんじよう聞いて怒りや。誰がお前に喋りの清八てな事を云ふかいな。今喜イ公が来て、女の惚氣を云ふてよるので、大きな聲を出しな。そんな事を喋りな。云ふてる處へお前が首を出したので、喋りな。清八やが来た。と云ふたんや。誰がお前に喋りやなんて云ふかいな。」

「ア、そうか。源やん勸忍してや。俺いは怒ると目が見へぬね。喋りと聞いたんで、喜イ公の來て居るの知らんね。喜イ公何處に居るね。」

「お前の横に居るがな。」

「ほんに。こゝに居るのが氣が付かぬね。ナニ。これが女に起請を貰ふた。フ、。阿呆らしなつて來た。つい此間まで溝をまたげて小便をしてよつたのに、もうそないになつたか。オイ喜イ公。其の起請とか云ふ物を俺にも一遍見せてんか。」